教育新宝島

5月特典 向山洋一 教育資料

No.06

2024 MAY

1990

向山式要約指導
「ニホンザルのなかまたち」

本資料について

1990年8月19日、新潟塾にて向山洋一氏は「向山式要約指導」の模擬授業を行った。

教材は、「ニホンザルのなかまたち」（光村3年国語）である。

今月は、この模擬授業の

(1)授業映像
(2)文字起こし・解説

を中心にお届けしたい。

さて、「向山式要約指導」の魅力は、

(1)すぐれた「要約の方法」
(2)すぐれた「授業の組み立て」

この2つにある。

物語文や説明文の教材を教える際、要約指導は極めて重要だ。

「向山式要約指導」は、子どもに力がつく。授業が楽しい。知的だ。

子どもたちが熱中する。

「討論の授業」にも発展できる。

「桃太郎の要約」をそっくりそのまま「追試」していただきたい。国語の得意な子もそうでない子も小学生も中学生も熱中する。これは、向山氏が小学校の教師であり、実際に授業をやりつつ指導法を開発してきたからである。

なお、本冊子には、

(1)向山洋一『教室ツーウェイ1991年2月号』（明治図書）p.9-11
(2)向山洋一『教室ツーウェイ1991年2月号』（直筆原稿）向山実物資料 XA01-199102-75
(3)新牧賢三郎『教室ツーウェイ1990年2月号』（明治図書）p.17-23
(4)向山洋一「教材文（向山メモ①）」1990向山実物資料 A09(1)-75-02-01
(5)向山洋一「教材文（向山メモ②）」1990向山実物資料 A09(1)-75-02-02
(6)向山洋一「授業構想メモ」1990向山実物資料 A09(1)-75-03
(7)向山洋一『向山式要約指導法（向山メモ）』向山実物資料 A09-135-01

が収録されている。

解説は、椿原正和氏である。

特典映像はこちら

https://vimeo.com/935687807/29b49c0eab

向山洋一氏は、次世代を担う若い先生方のために、20万点をを超えるさまざまな実物資料を残した。これらの一部を、メルマガ「谷和樹の教育新宝島」の特典資料として、会員限定で公開する。

- ●向山洋一の教育資料を解説付きPDF冊子にして毎月一回配信（30ページ前後）
- ●向山洋一の未公開映像・音声を年6回以上配信（不定）

●向山洋一『教室ツーウェイ1991年2月号』（明治図書）p.9-11

向山式要約指導

一人一人の子どもの要約がバラバラなのは、何も指導してないからだ。正しい要約指導をして、子どもに力がつけば、どの子の要約も同じようになる。向山式要約指導は、誰でもできる指導法である。

特集Ⅰ

向山洋一

1　みんなが納得する要約方法

NHKラジオで要約指導をすることになった。

教育番組ではない。「ふれあいラジオパーティー」という娯楽番組である。

「大人の小学校」というテーマで、私がホスト役になった。一時間半のトーク番組で、毎日教科が変わる。

「国語」のトークの中に、要約指導が入ったのである。演歌の神野美伽さんや落語の伯楽師匠を相手に授業をすることになった。

教材は「桃太郎」で、落語の「桃太郎」のさわりを伯楽師匠に一席おねがいした。

なぜ、この番組に「要約指導」が入ったかというと、取材（打ち合わせ）の段階で、ディレクターと構成作家が興味を持ったことによる。

「私も『要約しなさい』という勉強をうけてきましたが、ぼやっとした内容でした。なるほど、要約とはそのようにするのですか。

向山先生の要約は、おじいちゃんやおばあちゃんにも分ります。ぜひ、やって下さい」

このように言われたのである。

そこで「教科書」「文章」なしに、ラジオで要約指導をすることになった。

要約とは「誰がやってもほぼ同じ答になる」ということでなければならない。

算数の計算は、全員が同じ答になる。理科・社会の答もほぼ同じになる。

要約とて同じである。「要約は一人一人ちがって当然である。個性があっていいのだ」などということはない。

私のクラスの子どもに要約させれば、ほぼ同じ答になる。

教師がこのことを自覚しているかいないかで、子どもにつける力は違ってくる。

> 要約させれば、ほとんどの答は同じになるものなのだ。ならないのは指導が悪いからだ。

こうした自覚を持った教師なら、子どもに力をつけられる。この自覚がない教師は、たいした力をつけることはできない。

さて、NHKラジオで、タレントさんに要約させた結果はというと、答はほとんど同じようになった。

出演者は「なるほど」と、うなずくことしきりであった。

これは、青年事務局の上達講座で私が模擬授業した方法と同じである。

上達講座の方法を紹介しよう。

2　「桃太郎」の要約指導法

初めに「桃太郎」の話を誰かに語らせる。

「昔々、あるところに……」と始まる物語である。

なぜ「昔々」なのか。なぜ「あるところ」

なのかは、落語に出てくる。

「昔話」についてしゃべり、「語り方」について解説する。「語り」と「説き」は、しゃべり方がちがう。

脱線の好きな人なら、「今度は、鬼を主人公にしてお話をつくりかえなさい」などとやってもいい。

視点を変えさせるのである。これは三〇年も昔、石川正三郎氏のやっていた実践である。

「平和にくらしていた鬼の島に、家来をつれた桃太郎がせめてきました」というような話になる。

昔だって、「視点の転換」を、このように教えていた教師もいるわけである。

さて、脱線を好まない人は、本論をすすもう。桃太郎の話を終って、次のように発問する。

> 桃太郎の話を二〇字以内にまとめなさい。句読点も字数に入れます。

「なぜ、二〇字なのか」という確たる論拠はない。二一字でも、一九字でも良い気はする。

ただ、私の実践の感じからいうと「二〇字以内」というのが、最も手ごろである。

教えやすいし、問題点も出やすいということである。

子どもたちは、ノートにまとめていく。

「二〇字にこだわらないで、まず書いてごらんなさい。一度書いてしまってから、二〇字に削っていきなさい」という話をしたりする。

さて、上達講座に参加した教師の場合どうだったかを紹介しよう。

> A　桃太郎はおともをつれて鬼退治をしました。
> B　鬼退治をして出世した桃太郎の話
> C　桃から生れた桃太郎は鬼をたいじしました。
> D　桃から生まれた少年が動物の手下と鬼退治
> E　昔、桃太郎が鬼ヶ島へ行って鬼退治をした。

五人とも、見事なくらいにちがっている。この五人に、一〇点満点で点をつけるとしたらそれぞれ何点になるだろう。また、その点の根拠は何だろう。

この五人に点をつけられる人なら、要約の指導ができるといっていい。

私の採点は次の通り。A－8点　B－7点　C－7点　D－6点　E－7点。

「桃太郎」の話は、要約するのに最も易しい教材である。だから、みんな高得点だが、教科書教材でやったら、きっと一点、二点が続出するだろう。

さて、要約するのだから、「一つの言葉」「一つの文字」もゆるがせにできない。

選びに選びぬかれた言葉や文字が二〇字の中に入るべきである。

「桃から生まれた少年」などとまどろっこしい言い方は避ける。「桃太郎」だけでよい。

「鬼をたいじしました」など冗長である。もっとスリムな言い方にすべきだ。

「選びぬかれた言葉」とは、つまり「キーワード」なのである。

次のように、発問する。

> 桃太郎の話で、大切な言葉を三つ書き出しなさい。

これは、ほとんどの人が同じ答になるだろう。

「桃太郎と鬼退治と犬猿きじ」である。

この三つのキーワードぬきに「桃太郎」の話は語れない。逆に、この三つの言葉さえあれば、この物語の骨格をつかめる。

さて、三つのキーワードは出された。次に文章の書き方である。冗長な言い方を避けるべきである。それには「体言止め」がいい。

しかも「体言止め」にすれば、最後に「たった一つのキーワード」をもってこれる。

そして次のように言う。

> 三つの言葉から、一番大切な言葉を選びなさい。

これは、よほどへそまがりでない限り「桃

そして次のように言う。

> 三つの言葉を入れて二〇字以内でまとめなさい。その時、桃太郎で終る文にしなさい。

上達講座では、前述の五人は次のように答えた。

> A　犬さるきじをつれて鬼退治にいった桃太郎
> B　犬さるきじを連れて鬼退治をした桃太郎
> C　きじさる犬を連れて鬼退治した桃太郎
> D　犬猿きじを手下に鬼退治をした桃太郎
> E　犬猿きじといっしょに鬼退治した桃太郎

ほとんど同じ答になった。一〇〇名近くの参加者一同、みんな納得していた。

以上が、向山式要約指導の基本編である。実際に授業をするときは、もう少し組み立てを工夫する。

3　段落の要約指導法

説明文で要約指導をするとしよう。

初めから「全文の要約」などさせてはならない。

全文の指導など、力がついてからで十分である。初めは、五行か六行の第一段落を扱えばよい。「要約のやり方」をいきなり教えてはいけない。授業がつまらなくなる。

段落指導法は次の通りである。

一　「第一段落を二〇字以内でまとめなさい」と発問し、ノートに書かせる。

子どもは、あれこれ苦心して、書き出す。

できた子は、黒板に書かせる。一人また一人と黒板に書いていく。

二　黒板に一〇人ほど書いたら、全員書くのをやめさせる。

「先生が採点していきます」といって採点していく。

一つ読みあげ「これは、とってもいいのですが、もうちょいですね」などと言って「二点」などと書く。

採点基準は、お分りだろうけど、最も大切なキーワードが入っていれば四点、他に三つのキーワードとして、一つにつき二点というように定める。

但し「日本語としておかしい」というのは、極端に減点する。

三　採点した後「もう一度書き直してごらんなさい」と言って、再度、ノートに書かせる。

子どもは、熱中する。

再び、できた順に一〇名ほど書かせる。

つまり「大切な言葉一つにつき何点」と教えるのである。

四　そして、もう一度ノートに書かせる。「まだ黒板に書いてない人、黒板に出てごらんなさい」と指示する。

八点、九点、一〇点の高得点が続出する。

ここまで、ほぼ一時間である。これだけで子どもは、要約指導が大好きになる。

黒板に出て書くのを何とも思わなくなる。

五　次の時間に、第二段落・第三段落をやる。

この場合も、黒板を使う。

三時間目は、ノートにその後の段落を要約させる。私の場合は、要約指導を三時間ほど続ける。

教材のすべてを終らなくてもいい。

三時間すれば「要約」の基本的なことは身につけられる。

教科書全文の要約指導を扱うのは、また別の問題が生じる。段落要約とは分けた方がいい。

教科書を通読し、漢字指導をした後、次のように始める。

> 全文を三〇字以内で要約しなさい。

この実践は後日の機会に。

〈本誌編集長〉

●向山洋一『教室ツーウェイ1991年2月号』（直筆原稿）　向山実物資料 XA01-199102-75

向山式要約指導法

向山洋一

一人一人のこどもの要約がバラバラなのは、何も指導してないからだ。
正しい要約指導をして、こどもに力がつけば、どの子の要約も同じようになる。向山式要約指導は、誰でもできる指導法である。

みんなが納得する要約方法

一、「桃太郎」と「浦島太郎」は

NHKラジオで要約指導をすることになった。

教育番組ではない。「ふれあいラジオパーティーL」という娯楽番組である。

「大人のふるさと」というテーマで、私がホスト役になった。一時間半のトーク番組で、毎回教科がきまる。

「国語」のトークの中に、要約指導が入ったのである。漫才の伊野美枝さんや、落語の伯楽師匠と相手に授業をすることになった。

私の相手は「桃太郎」で、落語の「桃太郎」とのさかりと伯楽師匠に一席あぬかいした。

なぜ、この番組に「要約指導」が入ったかというと、「我（打ち分わせ）の55分間で、ディレクターと構成作家が驚きを話ったことによる。

「私も、要約をしなさい。」という効果をうけてきましたが、何やっとーしたかなるとした。

なるほど、要約とはそのようにするのるのか。

向山先生の要約は、みいちゃんやみはあちゃんに自分りまる。ぜひ、やって下さいと。

このように、きゃたのるある。

そこで「桃太郎」の文章」なしに、ラジオで要約指導をすることになった。

要約とは「誰かやってもほぼ同じ答になる」ということ。なぜ、なぜ、なぜ。

算数の計算は、全員が同じ答になる。

今の答もほぼ同じになる。

要約とは、ほぼ同じになる。

NHKのラジオで、「要約は一人一人がつくる答」でみる。何度かあっていいそだしなどということはない。

私のうそをするとともに要約させたが、ほぼ同じ答になる。

桃太郎がこのことを自覚しているかいないかで、こどもに力がつくかつかないかがきまってくる。

要約こやが、ほとんどの答は同じになるものなのだ。なぐないのは、間違えるか、ずいぶんだ。

こうした自覚をもった桃太郎なら、こどもに力をつけられる。この自覚がない、自分は、たいしたかとつけることはできない。

さて、NHKラジオで、ダレこと上さんは要約させた答は、というと、ほとんど同じようになった。

答は

五度答はつなるほどと、うなづくことしきりであった。

こちらは、青年部員の上遠藤氏とまが拝聴した方法と同じである。

上遠藤氏の方法を紹介しよう

一、「桃太郎」の話を誰かに語る。

初めに「桃太郎」の話を誰かに語る。

「昔々、あるところに……」と始まる物語である。

なぜ、昔々となのか。なぜ、みるところ

「教室ツーウェイ」原稿用紙　B5判　9ポ20字×30行×3段（行間6ポ　段間3倍アキ）

なのか。落語にまとめてくる。

「落語」についてしゃべり「語り方」について解説する。「語り」とつ話きは、しゃべり方がちがう。

聚楽の好きな人なら「今度は、鬼を主人公にしてお話をつくりかえなさい」などとやってもいい。

鬼を主人公にしたのは、こちらはこれなら面白、石川先生のやっていた実践である。

「年和にしてさしていた鬼の島に、お金をつれた桃太郎がやってきました」というような話になる。

落語って、鬼の「退治」を、このようにえていたのが、もいるかもしれない。

さて、聚楽をなまない人は、本読をするもいい。桃太郎の話と絡って、このように対応する。

桃太郎の話をこれ程以内にまとめなさい。

句読点を含めて入れます。

つぎに、これ程なのかと、という疑たよ疑問はない。これ程になる。十人なりもいい気になる。

ただ、「私の感想の方がいい」というのが最初だってある。

鬼をやっぱり、「鬼を退治をみやすい」ということ。

るとみる。

るとみたら、ノートにまとめていく。

ここ。なにをちゃんとあらいて、まずあらいてください。

桃太郎の話をこれ程以内にまとめなさい。

句読点を含めて入れます。

A. 桃太郎はおとものつれて鬼退治をしました。

B 鬼退治をしてやっぱり桃太郎の話

C 桃から生まれた桃太郎は鬼をたいじしました。

D 桃から生まれた十年が動物の子下と鬼退治

E 昔、桃太郎が鬼ヶ島へ行って鬼退治をしました。

五人とも、同事なくらいにちがっている。

このなかに、十点満点をつけるとしたらそれぞれ何点になるだろう。また、その点の理由は何だろう。

この五人に点をつけるわる人なら、満点の理由がどうなるというていい。

我々採点は次のとおり。A：8点 B：7点 C：7点 D：6点 E：7点

「桃太郎」の話は、要約すると長くなるが、対応みる。だから、みんなは、なぜ、対応書きのかたちは、きっと一点、こたえが決まるだろう。

さて、要約するのだから、二つの言葉で一つのまとまりをゆるかやにできない。

このまとまりは、「桃太郎」と「鬼退治」と「大焼きじ」である。

このミつのキーワードをきこうの桃太郎の話は、逆に、このミつの言葉をつかめば、この物語の意味をつかめる。

さて、ミつのキーワードはまさにだ。それに文章の書き方をみよ。広告を言い方を選びきてみる。どうにしてもいい。「語りとめ」がいい。

ーあもっ語りとめ」にすべが、最終につたのは一つのキーワードしをもってこなる。

そしてそのようにする。

ミつのうまるまとめ。「桃太郎を退治する」選んでください。

選びに選びぬかた言葉やるかこれなのかにトるべきろ。

「桃から生まれた十年」「なとまどろっこしい言い方は避ける。「桃太郎」だけでよい。

「鬼をたいじしました」などが長である。

つとスリムな言い方にすべきだ。

「選びぬかた言葉」とは、つまりキーワードなのである。

このように、答える。

桃太郎の話は、大切な言葉をミつ書きなさい。

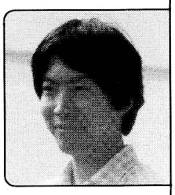
ミつは、ほとんどの人が同じ答になるだろう。

「桃太郎」と「鬼退治」と「大焼きじ」である。

「教室ツーウェイ」原稿用紙　B５判　９ポ20字×30行×３段（行間６ポ　段間３倍アキ）

「教室ツーウェイ」原稿用紙　B５判　９ポ20字×30行×３段（行間６ポ　段間３倍アキ）

●新牧賢三郎『教室ツーウェイ1990年2月号』（明治図書）p.17-23



新潟合宿の「演習」はどう行われたか

新牧賢三郎〔講師：向山洋一〕

'90年夏、新潟地方合宿で行われた向山洋一氏の講演を再現します。

「向山式要約指導」を講演したものです。

この要約指導法はすばらしいものです。

クラスの子どもたちの要約文がほとんど同じになってきます。

要約文が同じになるということが指導したということです。「バラバラでもよい」とは言えません。

では、始めます。

◇　◇

1　教材の読ませ方

教材は光村出版「ニホンザルのなかまたち」を使います。

子どもたちに教材を読ませる方法はいろいろあります。立って読ませるときもあります。

私（向山）が必ず行う方法は、

> 最初のページに小さな丸を一〇個書かせ、全文を一回読んだら黒く塗りつぶす

というものです。

読む場所は教室とは限りません。家でもいいのです。何しろ、一回読んだら黒く塗りつぶします。

「がんばって一〇個の丸を塗りましょうね」と子どもたちを励ます。

2　全文を要約する

「ニホンザルのなかまたち」はどのような話でしたでしょうか。それを聞いていきます。

まず、一番繰り返し読んだ方から答えていただきます。

この話は一言で言ってどんな話ですか。

「ニホンザルのなかまは強い絆で結ばれてくらしている」

「サルの社会」

「幸島のサルの話」

「ニホンザルの群の話」

いろいろなまとめがでました。この中には「よいまとめ」と「悪いまとめ」があるのですが、ここでは「どうでもいい」として先へ進みます。

3　第一段落を要約する

段落の所が一字下がっていますね。

> 段落ごとに①・②・③……というように番号をふりなさい。

これは確かめるのは簡単ですね。先生、最後はいくつですか。

「⑩です」

⑩の人、手を挙げてください。（全員、手を挙げる）

⑩以外の人、手を挙げてください。（誰も手を挙げない）

さすがですね。さすがは新潟県の先生たちです。

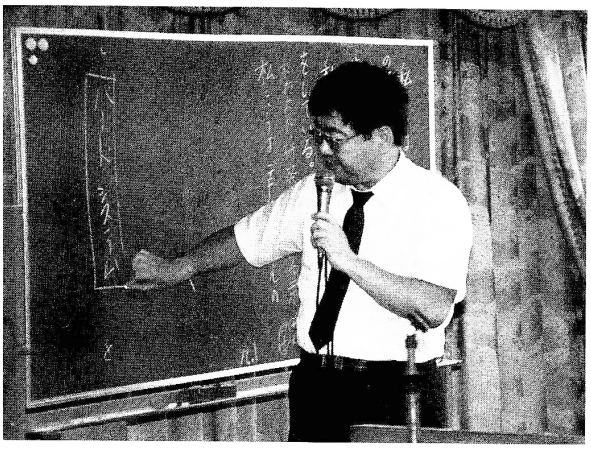
子どものようにりっぱです。

十段落と合っていれば一つ一つは確認しなくてよいのですが、子どものときはちょっと確認した方がいいですね。

先生、第一段落を読んでみてください。

第一段落

宮崎県串間市に、幸島という島があります。ここには、やく百頭のニホンザルが、むれを作って住んでいます。わたしたち研究者は、全部のサルに名前をつけ、三十年いじょう前から研究をつづけています。



はい、ここまでが第一段落ですね。では、

第一段落を二〇字以内でまとめてみてください。

ひらがなを漢字に直してもかまいません。句読点は「一字」と数えます。

二〇字以内で要約してください。

（机間を巡り、次々に指名する。指名された先生は前に出て自分の答えを板書する）

① 私達は30年以上日本ザルの研究をしています。

② 私達は、ニホンザルの研究をしています。

③ 私達は、幸島のサルの研究をしています。

④ 私達は、ニホンザルを研究しています。

⑤ 幸島の日本ザルがむれを作ってすんでいます。

⑥ 宮崎の幸島のニホンザルを研究した。

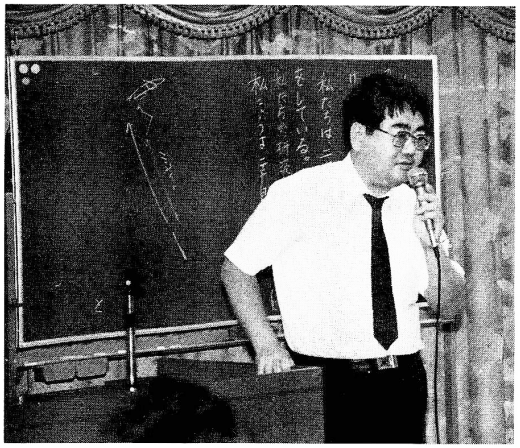
⑦ ニホンザルの研究が続けられている幸島。

⑧ 幸島に百頭の日本ザルがむれを作っている。

⑨ 幸島にサルをかい、研究している。

文章を要約するとは、文章を読む力のほとんど半分です。

向山学級では、前に書いたら必ず自分の名前を書かせます。



「自分の意見は人のように大切に扱うんだよ」と言っています。

九人の先生方に要約してもらいました。すると、九人全部違うんですね。

違いますから、これ、全部、間違っていると思います。

つまり、「言語技術」ですから正確に伝えなくてはいけないので、六行、七行程度の文章を要約しなさいというとこれだけ違った答えが出てきますので、文章を要約するという言語技術がないか、少ないかという感じがしています。

本でも書きましたが、私のクラスでやるとほぼ同じになります。

で、どうしてそうなるのかというのは、こ

れから三つのことをやっていかなくてはいけません。

4 「桃太郎」を要約する

要約するための三つの言語技術の中のその一をこれからやります。

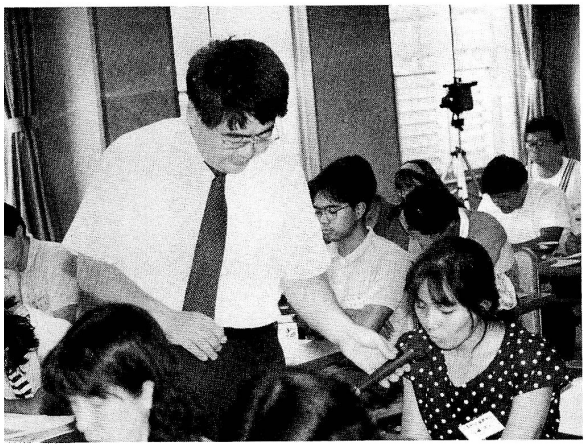
先生、桃太郎というお話を知っていますでしょうか。これを三分ぐらいでしてください。

「昔、昔、ある所におじいさんとおばあさんが住んでいました。

おじいさんは山へ柴かりに行き、おばあさんは川へ洗たくに行きました。

すると、川上から、ドンブラコッコ、ドンブラコッコと桃が流れてきました。

それを持っておじいさんの所へもどりました。



おじいさんに桃を見せて『すごい大きい桃だ。いっしょに食べよう』と言って、おじいさんといっしょにほうちょうを入れたところ『おぎゃあ』と大きな男の子がでてきました。

宝の桃だとおじいさんとおばあさんはびっくりして、その子に〝桃太郎〟と名前を付けました。

桃太郎はどんどん、どんどん大きくなって、ある時、おじいさんとおばあさんに言いました。

『おじいさん、おばあさん。ぼくは鬼が島の鬼を退治に行ってくる』

おばあさんは、大変心配でしたが、きびだんごを持たせておじいさんと『いってらっしゃい』と見送りました。

歩いていくと途中でサルに会いました。

『桃太郎さん、どこへ行きますか』

『鬼が島へ鬼退治に行きます』

『腰に付けているそれは何ですか』

『きびだんごだよ』

『一つ私にください』

『じゃあ、あげるからついておいで』

桃太郎はどんどん進んでいきます」

どうもありがとうございます。

では、これが最後まで終わったとします。

> このお話を二〇字以内でまとめなさい。

先生、どのようにまとめましたか。

「桃から生まれた桃太郎が鬼退治に行く」

〝桃から生まれた〟ということをお書きになった先生は手を挙げてみてください。（大多数の人が手を挙げる）

それは私のねらいに見事にはまったようです。

〝桃から生まれた〟などということは全然必要ないことです。

この話を聞かないで要約させますと〝桃から生まれた〟ということは出てこないのです。

この話を初めから聞いてもらいました。すると〝桃から生まれた〟ということがとても印象深く残るのです。

「鬼が島へ鬼退治」というと、これ、同じことが二つ重なっていますよね。

できるだけ重要な言葉を入れなければなりません。ですから、重なりはやめます。

> この言葉がなければ、この話が成り立たないという言葉は何でしょうか。

「鬼退治」（賛成者が手を挙げる）

「桃太郎」（賛成者が手を挙げる）

これはたぶん、「桃太郎」ではないでしょうか。

あたりまえのような気がしますが。

「桃太郎」がなければしまりません。

もちろん、「鬼退治」も必要です。

すると、ご自分が書かれた文の中に「桃太郎」と「鬼退治」という二つの言葉が入って

おられる方は手を挙げてみてください。
この段階でダメだという方もいるのですね。

このくらいの長さの文で二〇文字ぐらいにするには、重要な言葉は最後に持ってくる。そして、体言止めにする。

そのために「体言止め」はあるのですね。
一番大切な言葉は最後に持ってくる。
一番最後に「桃太郎」を持ってくる。かつ「鬼退治」の言葉も入っている。すると、

次に大切な言葉は何ですか。

「サル、キジ、犬です」

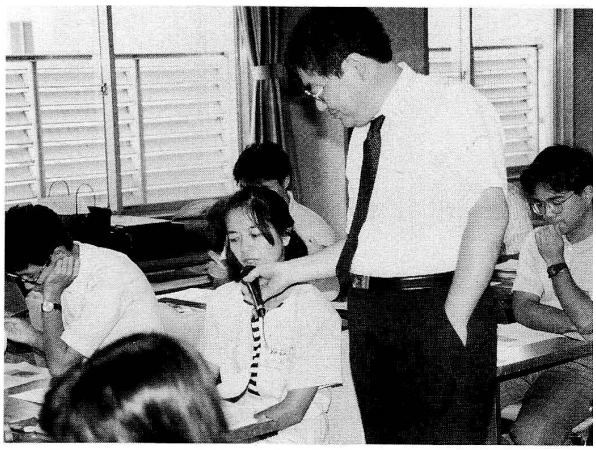
サル、キジ、犬ですね。おともにするものです。
これだけそろうと〝桃太郎〟の話になります。

文の最後に「桃太郎」がくる。もちろん、「鬼退治」「犬・サル・キジ」が入っています。それで、もう一度、二〇文字以内にまとめてください。

それでは、読んでもらいます。
「犬・サル・キジと鬼退治をした桃太郎」
「サル・キジ・犬と鬼退治に行った桃太郎」
お聞きのように、ほとんど同じになります。
これが要約です。
ですから、要約の技術を持っていれば、答えは同じになります。
「前に書いてあるのはどれも正解です」というのはウソなのです。
それは、自分自身の力のなさの証明です。

文章の要約というのは、ほとんど同じ文章にならざるを得ない。

まとめます。
まず、話の中でキーワードを捜します。この言葉がなければ成り立たないという言葉を選択してください。
そして、そのキーワードを文の最後に持ってきてください。



ということをお話しました。

5　体言止めを練習する

体言止めが出てきたのですから、体言止めそのものを練習します。
これが二番目です。

『昨日、私は、公園へ行った』

それでは、これを「私」を強めて、つまり、「私」で終わるように書き直してみてください。

それでは読んでいただきます。

「昨日、公園へ行った私」
そうですね。では、

> 「昨日」を強めるように「昨日」を最後に持ってくるように書き直してみてください。

これは、さっきのものよりもちょっと難しいですね。
一見、同じようですが、こちらの方が難しいです。
先生、どう書きました。
「公園へ行った私は昨日」
え～、とても詩的ですね。このようにお書きになられた方はいらっしゃいますか。（挙手なし）

先生はどうお書きになられました。
「私が公園へ行った昨日」
「私は」と書いた方、いらっしゃいますか。
何人かいますね。
先ほどの問題と違うのは、この問題では助詞の部分「は」を「が」に直さざるを得ない。
その所が難しいのです。
これを子どもたちにはゆっくりやってやります。
ノートに書かせて持ってこさせます。
合っていたら丸をつけてあげます。ダメなときはもう一度挑戦させます。
すると、子どもたちは次々に挑戦してきます。
ですから、これだけの授業を一時間かけて行うのです。

> では、「公園」という言葉を最後に持ってきてください。

これは二番目と同じです。
『昨日、私が行った公園』となります。
子どもたちには「みんなできた。よかったねぇ」とほめてやります。
二つやりました。
一つは、キーワードを捜すこと。
二つ目は、キーワードを文の最後に持ってくること。
そのとき、持ってくる言葉によっては助詞を変えなければならない場合がある。日本語にするためには。
また、どの言葉でも強めることができるのです。
「昨日、私は、公園へ行った」という文で、「昨日」という言葉でも、「私」という言葉でも、「公園」という言葉でも強めることができます。

6　再び第一段落を要約する

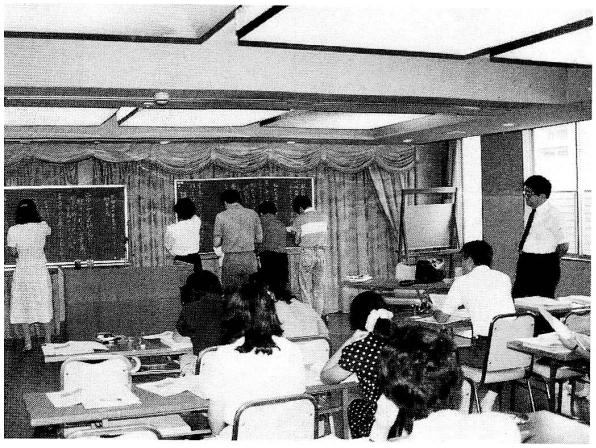
今まで行った「桃太郎」の話を聞き、二つのことを行った後では、今までの要約が少し違ってくると思います。
それでは、少し時間を差し上げますので

> 第一段落を二〇文字以内に要約しなさい。

こうしてみますと、ちょっと先生方の悩み方が違うと思います。
先ほどは漠然とした悩みだったと思いますが、今度は、どちらをどのように選択したらよいのか、言葉が頭の中で浮いてくると思います。
どの言葉が大事なのか。言葉の大事さに注目をせざるを得ないのです。
先ほど書かれた方、すみませんが前に書かれた文の横に、赤か黄色のチョークでもう一度要約文を書いてみてください。
ご協力をお願いいたします。

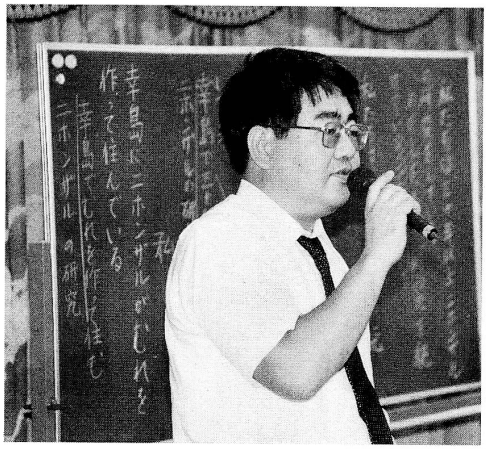
自分の書いた文の左隣にお願いします。
（先ほどの九名が前に出て黒板に自分の要約文を書く）
では、読んでいきます。

① 私たちが研究をしているニホンザル。
② 私たちが研究しているニホンザル。
③ 幸島でのニホンザルのむれの研究。
④ 幸島で三十年以上続くニホンザルの研究。
⑤ 幸島でむれを作ってすむニホンザルの研究。
⑥ 幸島のニホンザルを百頭研究している。
⑦ 研究が続けられている幸島のニホンザル。



⑧ むれを作ってすんでいる百頭のニホンザル。
⑨ 幸島でのニホンザルの研究。

ほとんど近くなっていますけれど、まだ、違いがあります。
さっき言ったのでは足りないからです。
文の最後を見ていきます。
「研究」
「ニホンザル」
「研究している」は前に言ったことと違いますのでのぞきます。
これ以外の人はいませんか。
「〃私〃です」
はい。〃私〃が最後です。
他にありませんか。確か、先生は違ったのではありませんか。
あっ、まだ、途中でしたか。
「研究」という言葉と「ニホンザル」という言葉がでてきます。
「幸島」を出すか「三十年以上」を出すかは人によって違ってきます。
これ以外に、もうちょっと違って大事な言葉があるのです。
もう一度、第一段落を読んでみます。（第一段落を読む）
ここは、要するに、説明文の問題提起である訳です。
他の説明文でいえば、たとえば火山でいえば「～の火山はどうなっているのでしょうか」



などというように「～でしょうか」とあります。
そこで、他の文章では、
「〃か〃の付く文章を抜き書きしなさい」
というように教えます。
その部分に当たるのですね。
この答えの部分があります。論説の文章ですから。
答えは何段落かはお分かりでしょうけれども一番最後ですね。
第十段落は第一段落に対応して答えになっています。
『このようにニホンザルは大きなむれを作り、平和に仲よくくらしています。そして、子どもたちは大人にしっかり見守られながらすくすく育っています』

この前半の部分、『ニホンザルは大きなむれを作り、平和に仲よくくらしています』が答えになっています。

そうしますと元にもどります。

ここは問いの文章が出てこないのです。問いの文章が出てこないから、そういう点では、あまり良い文章とは言えません。

強いて、この四行の中に問いの文章を入れようとすると『三十年以上も研究を続けています』の前に入れるべきです。

しかし、何を研究しているのかの「何を」が入っていないのです。

何を研究したのでしょうか。

たぶん、答えは二通りしかないと思います。『ニホンザル』と書かれた方、手を挙げてみてください。『ニホンザルの研究』。

『ニホンザルのむれ』と書かれた方、手を挙げてみてください。

ここは『ニホンザルのむれ』を研究したのですね。

ですから、『三十年以上も前からニホンザルのむれを研究しています』となり、その結果がさっきの第十段落になります。

第二段落から第九段落まではそれの具体的な実例です。

死んだ赤ちゃんをめぐっての、離さないというお母さんの例。

ニホンザルは、むれの中で子どもは遊びながら育っていくという例。

ということは〝むれ〟が入らなければしょうがありません。

ということで黒板に書かれた文を見ていきますと〝むれ〟を意識していません。

『ニホンザルのむれ』ということこそがこの研究のテーマなのです。

「そうしますと、また、要約が違ってくると思います。もう一度、二〇文字以内に要約してみてください。

私がまとめたのは次の文です。

> 私達が三十年以上研究したニホンザルのむれ

こうしてみますと、だいぶ前のものと違ってきます。

「幸島」が最後にきている文はあきらかに違っているということがお分かりだと思います。

非常に難しいと思われるでしょうが、この第一段落が一番難しいのです。

第二段落はずっとやさしいのです。では、第二段落を要約してみてください。

先生、読んでみてください。（要約する）

「死んだ赤ちゃんを離さないお母さんザル」

これとほとんど同じだという人、手を挙げてみてください。（大多数の方の手が挙がる）

今、先生方に手を挙げていただいたように、大多数の方が同じになります。これが要約指導です。

「二〇字以内」というのは経験則ですが、これがいいみたいです。物語全体を要約するときは「三〇字以内」とします。

第二段落では、わずか一分程度でほとんどの方が同じ要約をしました。

これで要約指導を終わります。長い間、どうもありがとうございました。

◇　◇

以上で向山氏の講演が終わりました。ここで一つ付け加えることがあります。実は、私は講演の様子をビデオテープを観て再現しました。実際の講演は観ていません。ビデオテープをご覧になりたい方は東京教育技術研究所（〒142　品川区旗の台2～1～16～3F）までお申し込みください。

（写真撮影・松野孝雄先生）

一、全文通読

二、ひとことで言ってどんな話だろうか。

三、段落ごとに書きを考えなさい。

四、才一段落の要約。

五、要約の工夫。

六、再度の要約。

七、感想。

六　書いてあることをたしかに　説明文

ニホンザルのなかまたち

河合雅雄

宮崎県串間市に、幸島という島があります。ここには、やく百頭のニホンザルが、むれを作って住んでいます。わたしたち研究者は、全部のサルに名前をつけ、三十年いじょう前から研究をつづけています。

ある日、このむれでお母さんザルのザボンが、めすの赤ちゃんをうみました。ところが、生まれて七日目、かわいそうに赤ちゃんザルは死んでしまいました。お母さんザルのザボンは、かわいい赤ちゃんとわかれるのが、よほどつらかったの

＊島。　＊むれ　住む。　＊いじょう　死ぬ。　＊よほど　＊つらい

でしょう。死んだ赤ちゃんをしっかりむねにだきしめてはなしません。

死んだわけを調べるために、わたしたちは、赤ちゃんザルを取ろうとしました。すると、ザボンは赤ちゃんを地面においてはげしくほえかかってきました。「今だ。」と思って、わたしが近づこうとしたとき、赤ちゃんのそばにかけよってきた者がいます。兄さんザ

*はなす

かけよる *よる

六　書いてあることをたしかに　説明文

ニホンザルのなかまたち

河合雅雄

1 宮崎県串間市に、幸島という島があります。ここには、やく百頭のニホンザルが、むれを作って住んでいます。わたしたち研究者は、全部のサルに名前をつけ、三十年いじょう前から研究をつづけています。

2 ある日、このむれでお母さんザルのザボンが、めすの赤ちゃんをうみました。ところが、生まれて七日目、かわいそうに赤ちゃんザルは死んでしまいました。お母さんザルのザボンは、かわいい赤ちゃんとわかれるのが、よほどつらかったの

＊島。　＊むれ　住む　＊いじょう　死ぬ　＊よほど　＊つらい

でしょう。死んだ赤ちゃんをしっかりむねにだきしめてはなしません。

3 死んだわけを調べるために、わたしたちは、赤ちゃんザルを取ろうとしました。すると、ザボンは赤ちゃんを地面においてはげしくほえかかってきました。「今だ。」と思って、わたしが近づこうとしたとき、赤ちゃんのそばにかけよってきた者がいます。兄さんザ

*はなす　*かけよる　*よる

ルのボラです。ボラは、死んだ妹を守ろうとしたのです。わたしたちは、ザボンとボラのしんけんなすがたに心をうたれて、赤ちゃんを取るのをあきらめました。

4 ニホンザルのめすは、五、六才になると、子どもをうみます。生まれたばかりの赤ちゃんは、目も見えず、自分で歩くこともできません。母ザルは、赤ちゃんをとても大切にしています。子どもがいじめられると、自分より強いあい手にでも向かっていきます。

5 子どもたちは、生まれて二か月くらいたつと、お母さんからはなれ、子どもだけのグループを作って遊ぶようになります。木登り遊びはもちろんのこと、レスリングやおにごっこ

10　5

守る。

*あきらめる

76

ニホンザルのなかま

ニホンザルのくらし

も大すきです。中には、さか立ち歩きをしたり、とんぼ返りをしたりして楽しんでいる子どももいます。子どもたちにとって、遊びはたいへん大切なものです。みんなとなかよくくらしていくことや、おたがいに助け合っていくことなどを、友だちどうしの遊びを通して学んでいきます。

6 ニホンザルは、母と子を中心とした、家族のようなグループを作って生活しています。その中におばあさんやおばさんがくわわることもあります。ニホンザルのむれは、このようなグループがいくつも集まってできています。

7 むれには、大人のおすがいます。リーダーは、その中でもっとも強いおすで、むれがうまくまとまるためには、なく

5

＊なかよ。助け合。

＊学ぶ。家族。

＊くわわる

10

＊おす

＊もっとも

＊まとまる

78

てはならないサルです。けんかが始まると、走っていってけんかをおさめます。犬などのてきがあらわれると、「クワン。」という大きな声を出してきけんを知らせ、みんなをにがします。そして、自分は、ゆうかんにてきに向かっていきます。

このむれに、カミナリという、たいへんすぐれたリーダーがいました。おこるとカミナリのようにこわいので、わたしたちは、この名前をつけ

*けんか

*てき

*ゆうかん

リーダーのかみなり

ました。でも、子どもたちにはやさしくて、めったにおこることはありません。カミナリが休んでいると、赤ちゃんがよく集まってきました。カミナリの近くだと、安心して自由に遊ぶことができるからです。ふつう、リーダーは、四、五年で交代しますが、カミナリは、二十年近くもリーダーをつとめました。

9 カミナリは、だれからもそんけいされていました。年をとって体が

*めったに
安心
交代。
*つとめる
*そんけい

80

弱ってしまい、ついに目が見えなくなっても、やっつけて代わりにリーダーになろうという者はいませんでした。長い間リーダーとしてむれを守ってくれたカミナリを、みんなで大事にしていたのでした。

10 このように、ニホンザルは、大きなむれを作り、おたがいになかよく平和にくらしています。そして、子どもたちは、大人にしっかり見守られながら、すくすく育っていきます。

5　10

＋弱る
＋ついに
代わり
＋平和

Ⓐ ① 百科のニホンザルに名前をつけて研究を続けている　大くま（　　）

② 学習時間の教室に分百科ニホンザルがいる　鈴木

① 30年間研究されているニホンザル

教室の

キーワード　4つ
- 30年
- 研究
- 教室
- ニホンザル

一番たくさんことが　日本ザル　（5年組）
二月に　研究している
三月に　名をつけて
四月に　教室で
30年間.
それとされる

Ⓑ 学習年の教室で飼育されている日本ザル

向山

第3段落

( )

死んだ妹ザルを守る兄ザルと母ザル

死んだ赤ちゃんを守ろうとするザボンとおう

妹ザルを守る母ザルザボンと兄ザルおう

死んだ妹を守りつづけた兄さんザルのおう

妹を守るザボンとおうに心をうたれた研究者.

課題. Ⓐ ザルが入ってない

② 兄・母が入ってない

多い

3人 Ⓐ 死んだ妹を守る母ザルと兄さんザル (たけし)

3人 Ⓑ 妹ザルを守る母と兄に心を~~[illegible]~~うたれた研究者 (えいみ)

死んだ

第3段落	① 研究者は…とろうとした
	② 母ザル・兄ザルは守った
	③ 研究者は心うたれしみとめた

Ⓐ 主文

( )

10 幸島で三年前から観察されてるニホンザル 長谷
10 幸島で三年前から観察されてるニホンザル 小宮

9 幸島で名をつけて観察されてるニホンザル こんぺい
9.5 幸島で前から名前をつけ観察しては日本ザル 合谷

8 宮崎県で観察されてる体長約の日本ザル 若宮
8 幸島で観察されてる体長約の日本ザル。 スヲ

10 死んだ赤ちゃんをはなさない母ザルのザル 長谷 10
9.5 死んだ赤ちゃんでしがりだきしめる母ざる たくや 9.5
9.5 子ちゃんザルをだきしめた母ザル しょうま 9.5
9.5 赤ちゃんザルを死んでわかれがつらい母ザル 雅 9.5
9.5 死んだ赤ちゃをずっとだきしめていた母ザル

向 山

（　　）

ツノのも。

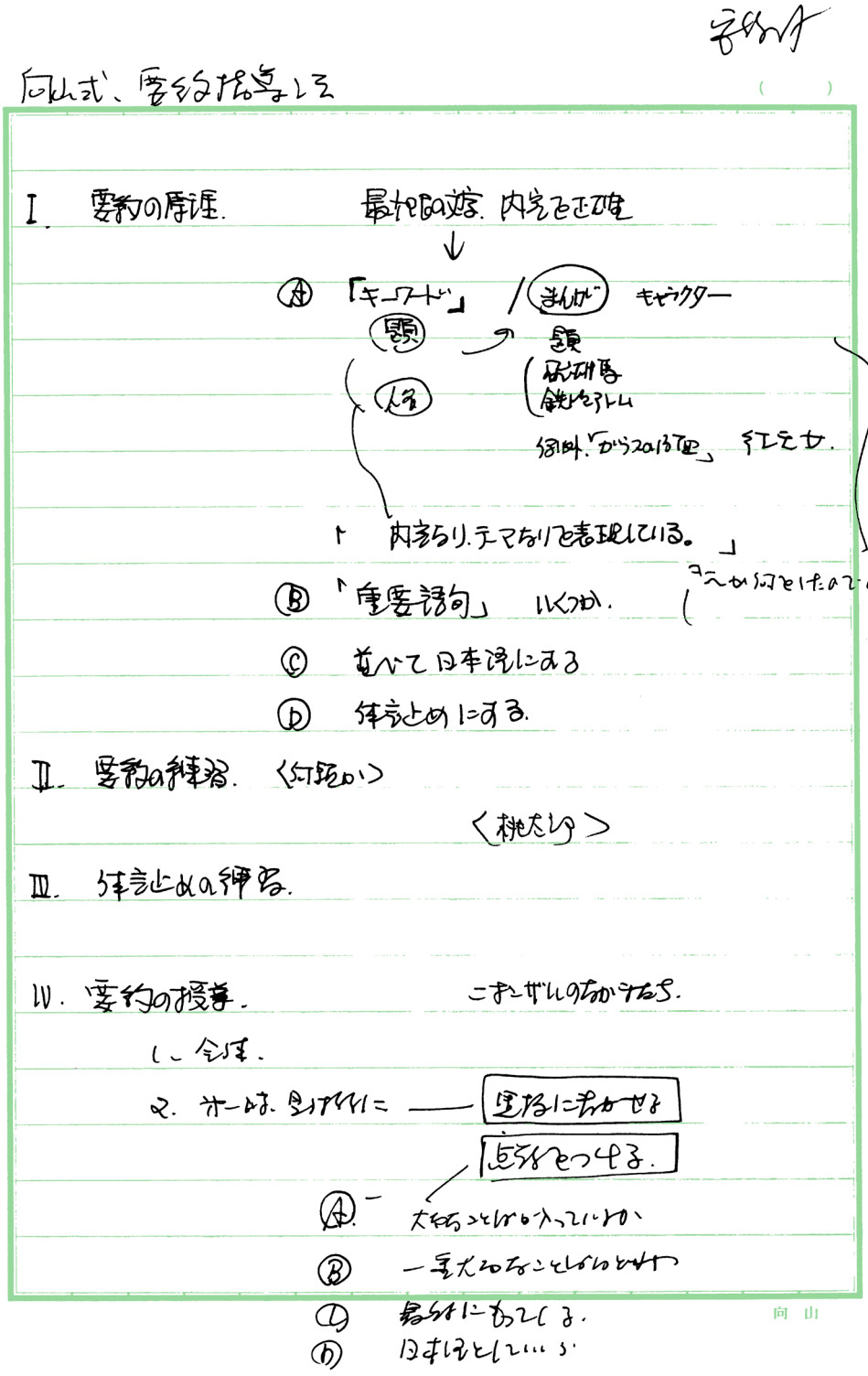
（大きなみれを絞り、ちかくを別に分している）
（こまこざしの研究。）

一番大切な会。
こ弱いたわる会。

（こまこざし
みれをつくる
元気
をる。）

みれをつくり手別にしりしりなとはりみるは月手がいたら
毛ぬでみれをつくりちかくを別にしりているこまこざし

向山


向山式、要約指導法
I. 要約の原理.
最初の文章. 内容を正確
Ⓐ 「キーワード」 / まんが キャラクター
題
人名
題
内容より. テーマなどを表現している。」
Ⓑ 「重要語句」 いくつか.
Ⓒ 並べて日本語にする
Ⓓ 体言止めにする.
II. 要約の練習.
<行近かい>
<桃太郎>
III. 体言止めの練習.
IV. 要約の授業.
こおにざるのなかまたち.
1. 全体.
2. ポーポ. 見ていたように
正確に書かせる
点数をつける.
Ⓐ 大切なことが入っているか
Ⓑ 重大なことがらとみれる
Ⓒ 簡単にまとめる.
Ⓓ 日本語としていい.

子どもたちは三度飛躍する。向山式呼びかけ指導の驚きロジック

椿原　正和

一　音読の丸一〇個システムの組立て

教科書の音読指導の最初に題名の横に小さな丸を一〇個書かせます。一回読んだら丸を一つぬるというシステムです。向山氏が開発し広めたシンプルで効果のある指導法です。

演習ビデオにもこの指導場面があります。特に重要なポイントが2つあります。

①学び方の指示
②丸をぬったかの確認

①学び方の指示

向山氏は、丸一〇個のシステムを「一回最後まで読みおわったら一個ぬる。お家でも学校でも」の後に次のように説明しています。

先生に言われなくてもぬる。

先生に言われなくてもぬる。

私は、全国行脚の授業の中でこの説明を入れていませんでした。ビデオを視聴した時、衝撃が走りました。さらに、この記録は解説資料にも記述がないのです。

さらに、向山氏はこの説明を「確認」しています。この「確認」が次のポイントです。

②丸をぬったかの確認

向山氏は、丸一〇個の説明をした後に実際に教材を読む時間を設定しています。教師相手にしては、若干読ませる時間が長いなあと感じました。

その理由が、音読後の向山氏の次の指示で分かりました。

「一つぬった人？二つぬった人？三つぬった人？」

この音読の際には「一回読んだら丸を一個ぬります」とは指示していません。

その上で読み終わった後の確認をしています。ぬった参加者とぬるのを忘れていた参加者がいるはずです。子どもでも同じです。ぬるのを忘れていた子を注意したり叱ったりすることはありません。

しかし、参加者は、

一回読み終わったら丸を1個ぬる

というシステムが強烈にインプットされたはずなのです。

システムをインプットする組立て

これも向山型の特徴です。

二　要約文を板書させる組立て

「桃太郎」の要約指導は、基礎編としてとても分かりやすい指導です。

現在にいたるまで多くの教師によって追試し続けられています。

要約指導には、

板書の回数と組立て

というポイントがあります。

これは、特典資料の新潟合宿での記録（ビデオ含む）には出ていません。向山氏の「向山式要約指導」（「教室ツーウェイ」一九九一年二月号）の中で述べられています。

要約文は、三回板書させます。

向山氏は、板書させる子どもを次のように指定しています。

一回目　できた子は、黒板に書かせる。
二回目　再び、できた順に一〇名ほど書かせる。

つまり「できた子」に板書させているのです。学級の中では勉強のできる子たちです。しかし、一回目の板書の評定では「二点」「三点」が続出します。それでもめげずに二回目にチャレンジする子たちです。

そして、最大のポイントは、三回目の板書です。満を持して勉強の苦手な子たちを舞台にあげるのです。

向山氏は、三回目の板書の際に、次のように指示しています。

三回目　まだ黒板に書いていない人、黒板に出てごらんなさい。

三回目に板書するのは、勉強の苦手な子どもたちです。

そして「八点、九点、一〇点の高得点が続出する」という逆転現象が生じるのです。

このように、向山型要約指導は、要約のシステムと「板書の回数と組立て」がセットで最大の教育効果をあげるのです。

三　教材研究の肝「むれ」

「ニホンザルのなかまたち」の要約指導の最大の肝は、次の語句です。

むれ

この説明文は「問いと答えの対応」が不十分です。「答え」は十段落にありますが、「問い」の一文がないのです。向山氏は日本言語技術学会での「花を見つける手がかり」の授業で、「問い」の一文をリライトさせる授業をしています。

当時は、誰もやったことのなかった授業展開でしたが、今では三年生「すがたをかえる大豆」（光村三下）の「学習の手引き」に「問いを入れるとしたら、どこに、どんな文を入れますか。」とあります。向山型要約指導が教科書レベルにまで広がっている証です。

さて、当然「ニホンザルのなかまたち」でも「問い」の一文をリライトする授業が可能です。例えば、次のようになるでしょう。

ニホンザルは、どのようにくらしているのでしょうか。

これで「問いと答えの対応」という説明文指導の基本はクリアーできます。

しかし、この指導からは、「むれ」という重要語句の指導はできません。

要約指導によって「何の」研究を続けているのかということが明確になるのです。これこそが、教材研究の肝なのです。

教育新宝島

5月特典 No.06 | 2024年5月

向山洋一 教育資料

1990 向山式要約指導「ニホンザルのなかまたち」

特典映像

https://vimeo.com/935687807/29b49c0eab

発行日　2024年5月3日

発行所　向山洋一教育技術研究所

所在地　〒142-0064 東京都品川区旗の台２丁目４番12号

谷和樹の教育新宝島
https://shintakarajima.jp

向山洋一公式ウェブサイト
https://mukoyamayoichi.com

このPDFは、プリンタの「冊子印刷」を選択すると冊子になります。
他人への譲渡および個人研究以外の目的で使用することを禁じます。